# 「看護の源泉に立ち戻って、キリストのやさしさ、キリストの手を差しのべよう」

## 第46回 JCNA全国大会

日時：2004年10月8日(金)～10月9日（土）
会場　：ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル
日本カトリック看護協会　横浜支部

（大会２日目）

井深八重氏と、講師 阿部志郎様の紹介

大会２日目を迎えまして、井深八重氏の遺したもの「看護の源泉に立ち戻って」をテーマに井深八重様を偲びたいと思います。

井深八重様をテーマに取り上げた事は、井深八重様が横浜支部にある神山復生病院に生涯を献げられた方である事、そして、カトリック看護協会の初代会長として２０年間就任されました。この偉大な功績から井深八重様が私達に遺してくださった事などを、この大会の場を通して、井深八重様から頂いたメッセージを想起して、カトリック看護師として何を大切に実践して行く事をお望みになっていたのかを考えて行きたいと思います。

ここで、なぜ阿部志郎学長様をお迎えするようになったかというその経緯を説明させて頂きます。私達が大会の準備を進めるにあたって、井深八重様の事について文献を探しました。そうしましたら、阿部志郎様が井深八重様に敬愛の念を抱いていらっしゃる事をあちらこちらの論文や書籍、ビデオ等で知ることができました。そこで、井深八重様をテーマにディスカッションを行おうというふうに決めました。そのディスカッションをより良くするためには、やはり阿部志郎様をお迎えしてご講演を頂く事がより良いディスカッションにつながるのではないかというふうに考えたわけです。それで、本日、大変お忙しい方でいらっしゃるのですが、私達の事を十分ご理解いただきまして、今日ここにご講演をいただく事になりました。では、講演の前に井深八重様と阿部志郎様のご紹介をしたいと思います。

井深八重様のご紹介をいたします。井深八重初代会長は、明治 30 年に生まれ、成長の後、同志社女子学校から同志社女学校専門学部専門部英文科、現在の同志社女子大学に学び、大正 7 年、長崎県立長崎高等女学校英語教師となり、長崎に赴任されました。翌年、大正 8 年、ハンセン病の疑い有りとの診断により、静岡県御殿場の神山復生病院に入院されました。大正 11 年、当時の院長ドルワル・ド・レゼー神父様から再検査を勧められ、診察の結果、ハンセン病を否定されました。神父様からは病院を出る事を勧められましたが、井深初代会長は、復生病院にとどまる事を希望されました。ハンセン病と告げられた大きな衝撃、悲しみの内に始まった療養生活でしたが、高齢なレゼー神父が全てを献げて日本のハンセン病患者のために献身されている姿に日々接する中で感銘を受け、日本人として恩返しをしたい、病院のために役立ちたいという決意からでした。大正 12 年、看護師の資格を取得し、神山復生病院ではただひとりの看護師となり、その後、昭和 53 年引退されるまで、師長としてハンセン病患者のために献身されました。カトリック看護協会は、ピオ 12 世教皇の下、ローマ聖座の勧め

が有り、フルステンベルグ横浜司教様のご指導の下に、井深様、他のカトリック看護師が尽力され、昭和32年発足しました。井深様は初代会長として、カトリック看護師の使命を伝えるために全国を東奔西走のご活躍で、昭和51年辞任し名誉会長になられた後も協会のために尽くされ、協会の成長を切に願われ、平成元年、92歳で心筋梗塞のため永眠されました。井深様の功績に対しては、昭和34年2月、バチカンにおいて、ヨハネ23世教皇様より、聖十字勲章プロ・エクレジア・エト・ポンティフィチェ、10月には黄綬褒章、昭和36年第18回フローレンス・ナイチンゲール章、昭和41年王冠章勲五等、昭和52年朝日社会福祉賞他、数多くの表彰がされました。また昭和50年には同志社大学から名誉文化博士の称号も授与されています。マスコミにも多く取り上げられ、昭和50年には、アメリカのタイム誌にマザーテレサに続く日本の天使として紹介されています。

引き続きまして、今日講師でお出でいただきました阿部志郎様のご紹介をいたします。阿部志郎様は、現在横浜基督教社会館館長であり、神奈川県立保健福祉大学学長、東京女子大学理事でいらっしゃいます。先生は、大正15年2月、東京青山にお生まれになりました。その後、昭和24年東京商科大学、現在の一橋大学をご卒業、昭和28年には同大学大学院を終了されました。またアメリカではユニオン神学校を卒業されています。ご職歴は、昭和24年明治学院大学助手に着任され、その後トィンビーに傾倒され昭和25年渡米し、ニューヨークのスラム街で活動なさいました。昭和27年帰国後、明治学院大学に復職され、昭和29年同大学助教授になられました。そして昭和32年横浜基督教社会館館長にご就任されました。昭和61年には、国際社会福祉会議推進委員、昭和63年から平成6年まで国際社会福祉協議会副会長を務められ、平成7年神奈川県立保健福祉大学学長に就任されました。ご表彰は、昭和63年藍綬褒章、昭和64年には朝日社会福祉賞他、沢山ございます。またアメリカでは名誉社会福祉学博士号などを受賞されています。著書には、大会誌にも沢山載せてございますが、その他にも「キリスト教と社会福祉」等、数多くお有りになります。

それでは、阿部志郎様、よろしくお願いいたします。

## 講演２　「井深八重氏の遺したもの」

神奈川県立保健福祉大学学長　　阿部志郎

「盥(たらい)から盥(たらい)にうつる　ちんぷんかん」

小林一茶の句なのです。盥から盥へ、初めの盥は、産湯に使う盥です。もう一つの盥は納棺する前の湯潅でございます。私が産まれた時、お産婆さんに取り上げてもらっております。ほとんど全部の人がお産婆さんに取り上げてもらったのです。現在は、自宅で分娩なさる方は1000人に２人だけです。昔は自宅で死にました。今自宅で死ねる方は、100人の中の15人。盥から盥へ、という時代から今日、病院から病院へという時代に移っております。この盥から盥の間、ここに人間の一生が営まれます。仏教の言葉で申しますと、生病老死、生まれて病気になって老いて死ぬ、これを四苦と申します。四つの苦しみ。その苦しみを経験し、喜怒哀楽の内に人生を過ごす事になります。そして、たった一回限りの人生です。今ビデオに写りましたから、皆さんよくお分かりになりましたけれども、私は敬称略します。

井深八重という人は、人間的、社会的には、苦しみの方が遥かに大きかった人であります。なのに、その苦しみを喜びに変えて希望を示した人生を送られました。人間の人生、大きく分けますと三つになります。愛されるという時期、第二が人を愛する時期、第三は、再び人から愛されるという時期です。人は誰しも愛されて育ちます。赤ちゃんが生まれて、母親に抱かれ、お乳をふくみます。この母親と赤ちゃんが、眼差しを交わす。赤ちゃんは胎内にいる時の脈動をそのまま感じながら誠に安らかでございます。私はそれが愛の一つの原形だと思います。その生まれた赤ちゃんに、親が、お爺さん、お婆さんが言葉をかけます。韓国ではかける言葉が決まっています。「カックーン」。誰しも赤ちゃんに「カックーン」と最初に言うんです。これに相当する言葉を私共は持っておりません。「いないいないばぁ」なんておどかししかないのです。他の国にも無いようでありますけれども、韓国では決まっております。これが対話の始まりでございます。

皆様方の専門職、看護、Nurse（ナース）です。Nurseという言葉は、Neutrioという言葉から出てまいりますけれども、それは授乳という意味です。親が子どもにお乳を与える。それが看護という意味でございまして、母親が子どもに乳をふくませる。その愛に基づく専門職が看護という事になります。子どもは、親から周りから愛されて育ちます。井深八重は家庭的には不幸でございました。十分な愛を受けておりません。ただ、今ご紹介に有りましたように、京都の同志社で過ごした時は、先生方から愛され、友達と交わり、楽しい時代を送っております。愛されるという時期を経て、

人間は愛する時に移って参ります。節目は二十歳ということになりましょうか。十分に愛された経験を持つ者が、人を愛する事ができるのです。愛されなければできません。井深八重は愛されたという経験は誠に乏しいんです。にもかかわらず、愛する生活へと移って参りました。特別養護老人ホームで一人のお年寄りが亡くなりました。その方が寮母に亡くなる前こう言ったんです。「今度、生まれ変わったら私が世話をするよ。」遺言であります。６年間、寝たっきりで世話になって亡くなった方の、これが切実な言葉でございます。「今度生まれ変わったら私が世話をしたい。」おそらくこの方は、愛する時期に、十分人を愛する事が無かったという後悔がそこに含まれていると、私は思います。愛する時には、心行くまで人を愛する。それが私共の人生でありたいと思います。井深八重は、不幸な生い立ちでございました。なのに、人を愛し続けたのです。最初の経験は、今、お話にございました長崎の女学校に赴任をいたしました。恵まれた青春時代でございました。実に恵まれた時代を送りましたのに、ある日、一瞬にして人生が暗転いたしました。思いも及ばない、ハンセン病の宣告を受けたのであります。本人に全く自覚がありませんでした。「悲痛な驚きと恐怖に脅えた。」とご本人書いておられます。「一週間泣き明かした。」後にこう言われました。「私は人生で流すべき涙を一週間で全部流しましたから、今は流す涙は有りません。」と、ニコッと笑っておられました。でも、そういう想像もできない自分にとって悲惨な世界へ陥れられたのでございます。もしも、私達が同じ経験をするといたしますと、私ならその時、愛が消滅をします。神を呪います。人間に対して不信を抱きます。世を憎み続けるでしょう。なのに、井深八重はそこから愛の生活へ飛躍するのです。なぜ、井深がそこで愛の生活に入る事ができたのか。今、ご説明がございましたレゼー院長の下に療養しておられました。その院長を見て、親も及ばない親身な世話をしてくださる。遥々外国から来て、世に捨てられた私共患者のために尽くしておられる方を後にして、私は病院を去るわけにはいかないと、こう言われたのです。

私は、なぜ井深が病院に働く決心をしたのか、よく理解できないのです。それは、人間としては考えられない事でございました。井深がなぜ献身をしたのか、私は二つの事を思います。一つは、旧約聖書でサムエルが子どもの時、神様がお呼びになります。サムエルよ、三回繰り返すのです。三回目にサムエルは、神様の声だと分かりまして、「主よ、語り給え。僕、聞く。」とそこへ跪きます。そこでサムエルは神からのお告げを受けました。ミッションを与えられたのであります。井深八重は神の言葉に耳を傾け、祈りの姿勢を生涯崩しませんでした。祈り求めたのです。そして、神が井深にミッションをお与えになられたのだと思います。井深はその時、テストヴィド神父の事を思い浮かべたと言われました。テストヴィドという方は、幕末に横須賀でフランスのベルギーという技師が参りまして、造船所を始めます、これが横須賀の軍港へと発展して参りました。今でも横須賀にお出でになられますと、ＪＲの駅を降りた

左側の奇麗な公園をベルギー記念公園と呼んでおります。このベルギーが建てました中に聖堂がございまして、そこの司祭として来たのです。そして、横須賀に一つ教会を建堂いたしました。その後、御殿場に移りまして、御殿場の周辺各地を布教して廻りました時に、4人のハンセン病の女性を見つけました。ぼろをまとってまさに乞食のような生活をしていた女性達でございました。見るに忍びず、その4人を引き取って、一軒の農家を借りまして、生活を始めたのであります。テストヴィド神父は、司教に嘆願書を認めました。「ハンセン病の患者のために、病院を造ることをお許し願いたい。いづれの日にか、同僚諸氏と会えなくなる日が来ることを覚悟しております。」

この1898年という年の初めに、ダミアン神父がハワイのモロカイ島でハンセン病の患者と生活をしている内に感染をして亡くなったのであります。その事をテストヴィド神父は、知っておられました。次いでに申し上げますと、ダミアン神父が感染して亡くなって、母国ベルギーは軍艦をハワイに送って遺骨を引き取りました。その軍艦がベルギーの港へ帰って参りました時、港で一人、その軍艦を迎えた方がいるんです。ベルギーの国王であります。異郷の地でハンセン病でなくなった言わば一人のワーカーの死をベルギーの国民は悼んで、国民を代表して国王を港に立たせたのです。これが文化でございます。そのダミアン神父の死を知っておりましたので、いづれの日か同僚諸氏と会えなくなる日を覚悟しております。しかし、愛する日本の患者と生死を共にすることをお許しいただきたいと認めました。司教はそれを許しました。そこで、神山復生病院が始まったのであります。それから20年ほど後、明治38年という年になります。東京の三宅坂にございます英国大使館に、ある朝大使が出て参りますと、門の傍らに、数名の行路病人が倒れておりました。見ますと、明らかに昔の癩でございます。大使は政府に抗議を申し入れました。日本では伝染病の癩を路上に放置しておくのか。日本では、当時ハンセンがノルウェーでこの菌を発見したというようなことは情報を持っておりませんで、遺伝だと考えておりました。しかし、大使から抗議を申し入れられますと、これは外交問題でございますので、政府は慌てて、法律を作りました。これが法第11号といわれる法律でありまして、それがらい予防法へと代って参ります。この法律によって、公立の癩療養所が設けられることになりました。それが後に国立へと移って参ります。最初に造られました療養所、名前ばかりでございます。島の中でございます。そこには、ドクターもナースも一人もおりません。警察の所管でございました。患者を島から逃亡させないという任務を警察の署長が与えられたのであります。これが日本のハンセン病対策の始まりでございます。なぜ隔離収容したかと申しますと、祖国浄化のためと謳いました。汚いからです。奇麗にするんです。人の目には決して触れさせない。浄化する。これが日本の対策でございました。それよりも20年も早くテストヴィド神父は、愛する患者と生死を共にすることをお許し頂きたいとおっしゃったのであります。井深はテストヴィド神父の姿を思い浮かべ

た。信仰の先達を通して、井深は神からの呼びかけを受けたに違いないと思います。もう一つの理由、一昔前まで、世界中で最も尊敬する人物と言われたのは、アルベルト・シュワイツェルでありました。シュワイツェルが亡くなった後、マザーテレサへと代わったのです。このシュワイツェルが子どもの時、友達と相撲を取りました。友達を投げ飛ばしたのです。投げ飛ばされた友達がシュワイツェルに向かって「お前のように毎日肉のスープを飲み、ミルクを飲めれば、俺だって勝てるさ。」シュワイツェルは子どもながらに痛く心が傷つきました。傷つけられたのです。そして、恵まれた家庭に育った罪を感じたのであります。恵まれた者の罪でございます。これがシュワイツェルが30歳にして医学を志し、アフリカに宣教医として出かけた動機でございました。恵まれた者の罪、それを恵まれない者を通して贖うのであります。私は、井深がハンセン病の宣告を受けた一年後に、東京の土肥皮膚科という東大教授の診断を仰いで菌がでないことを判明をして帰って参りました時に、レゼー院長が、「家へ帰りなさい、もし帰る家が無ければ、フランスに送ってあげましょう。」とこう申し入れてくださったのです。地獄のような生活を続けるか、新しい希望のある世に戻るか、選択でございました。誰しも喜んで明るい楽しい生活を選びます。でも、井深はそれを拒否したのです。私は、井深のことを色々今まで考えました。一言もおっしゃいませんでした。でも、推察をしておりました。それは、菌が無い、ハンセン病ではない、健康な体であることの罪を感じたに違いないと思い至りました。病者と一緒に生活をしてきて、ただひとり自分が自由な世界に解放される。病者に対して、健やかであることの罪を思ったのではなかろうかと、まあ私は想像したのであります。その事に思い至りましたのは、沖縄でございました。沖縄で一つの言葉を見つけました。「チムグリサ」って言う言葉なのです。「チムグリサ」と言うのは、肝が苦しむという言葉でございます。

世界大戦の時、沖縄の一番南にハテルマ（波照間）と言う島がございまして、1,590名の住民がおりました。軍が、陸軍が強制的にその島民全部を疎開させました。後で言われましたのは、その島に1,200頭の牛と豚がいたんです。そして鶏がおりました。軍はそれが欲しくて追い出したんだとこう言われたのでございますけれども、島民が西表に疎開いたします。西表の「ハエミダ」（南風見田）という海岸でございますけれども、今参りましても実に不便な所でございます。その海岸に島民が疎開をいたしました。そこにマラリアが蔓延をしたのです。そして、85名の方々がマラリアで命を落としました。その内の66名が学童でございました。抵抗力がなくて学童が次から次へとマラリアで死んでまいりました。この学童を引率したのが識名信升（しきなしんしょう）という校長でございました。識名信升は、それを悼んで、南風見田の海岸に波照間に向けて石を建てました。「忘るな石、波照間、識名」と十文字記しました。痛恨の思いが込められております。自分が責任を持って来た子供たちが死んで行った。な

のに、引率者の自分が生き延びた、申し訳ない。これが沖縄では「チムグリサ」という言葉でございます。肝が苦しむんです。

聖書に、この言葉が出て参ります。どなたもご存知の善きサマリア人の物語がございます。強盗に襲われて、深い傷を負った旅人の前で、レビ人と祭司が通り過ぎるわけでございます。一人の異邦人であるサマリア人がそれを見て、憐れに思って近寄った、と書いてございます。ドンボスコの聖書では、側に寄ったと書いてあります。憐れに思って近づいた。憐れ、憐れみという言葉が聖書に度々出て参ります。憐れみという言葉は、同調という意味ではありません。可哀相だな、と言う意味ではないのです。文語体の聖書で旧約のエレミアのところに一個所だけ違う訳をしております。一個所だけです。それは憐れみという言葉を、はらわたが痛むと訳しました。これが原語の意味でございます。内臓が動くという意味です。はらわたが痛む。これが「チムグリサ」でございます。はらわたが痛むということは、全人格が揺り動かされるということです。全人格が揺り動かされたが故に近寄ったのです。一歩近づいたのでございます。そして、旅人の手当をいたしました。倒れている旅人を見て、私なら同情します。でも、そこまででございまして、見て見ぬふりして、端を通り過ぎるのです。でも、善きサマリア人はそれを致しませんでした。はらわたが痛んだが故に近寄ったのでございます。この近寄った一人が井深八重でございました。自分は自由の身になれるのに、おそらく、はらわたが痛んだのではないでしょうか、そして、再び同僚の患者に近寄ったのでございます。そして、井深が送った生活はサービスでございました。人に仕えることでございました。さっきのご紹介にありますように、ナイティンゲール章を受章いたしました。ナイティンゲール章ができましたのは、1920年でございまして、1920年から2000年の80年間にアメリカでナイティンゲール章を45人の方が受けました。英国でおなじく45人の方がナイティンゲール章を受章致しました。日本では89名の方がナイティンゲール章を受けたのです。アメリカ、イギリスの倍でございます。私は失礼ながら、日本の看護理論、看護技術がアメリカ、英国に勝っているとは思いません、そこから学んだのです。なのに、2倍の方々がナイティンゲール章を受けたということは、使命感です、コミットメントです。看護に取り組む姿勢が評価されたからでございます。井深八重はその象徴でございました。アジアの国に幾つかの仏教国がございます。タイ、スリランカ、ミャンマー、カンボジア、皆仏教国でございます。アジアの仏教は、昔、小乗仏教と申しました。今は、上座部(じょうざぶ)仏教と呼んでおります。小乗仏教に対して、日本の仏教は大乗仏教でございます。乗と言うのは、乗り物と言う意味です。日本は大きいんです、アジアは小さい。日本の仏教はアジアの仏教を或る意味では見下げて参りました。しかし、最近、日本の仏教も変わりまして、言葉も変わったんです。上座部仏教とも言うようになりまして、アジアの仏教を日本の仏教は見直している所でございます。戒律の厳しい仏教でござ

います。このアジアの国々の仏教では、紫門が見える時、と私は聞きましたが、紫門が見えるという意味は、夜が明けるとという意味です。夜が明けますと、寺から、托鉢に出ます。沢山のお坊さんが少年僧も含めて、列をなして、村や町へと托鉢に出て参ります。日本の托鉢は、門(かど)付けと申しまして、一軒一軒の家を廻って、布施を致しますと、拝んで帰って行かれますね。アジアの仏教で托鉢というのは、お坊さん達が、村や町へ出て参りますと、村の人々が通りで早くから待ち受けるのです。そして、僧侶が参りますと、布施を致します。この布施は食べ物です。お金ではありません。托鉢と言う歴史は食べ物でございました。食べ物、托鉢ですから、鉢に僧侶が受けます。これを持って返って朝食になるのです。同時にこれを貧しい人々に分かち与えるのが慣例でございます。見ますと、布施をする村人が僧侶の前に跪くのです。跪いて献げるのです。受ける僧侶は立ったまま、拝みもしませんし、一言も礼を申しません。黙って立ったまま受けます。これは私どもの常識に反するのです。上から下へ投げ与え、受ける者が跪くのが普通でございます。ところがアジア仏教においては、与える人が跪き、受ける人が立っているのでございます。キリスト教で申しますと、洗足です。主イエス・キリストが跪いてお弟子さんの足を洗ったのです。拝跪(はいき)、跪くのです。今朝この時間の前に皆様方ミサをあげられました。拝跪です。礼拝というのは、拝跪でございます。井深八重は、患者の膿で汚れた包帯を寒い冬の日も水で洗いました。毎日です。まさに洗足の生活を続けられていたのです。これが、サービスでございます。だから、人に仕えると、私どもは申します。人に仕えるのです。このサービスが何故できるか。仏教に大変好い言葉がございます。何方もご存知の言葉がございます。喜捨という言葉です。喜んで捨てると書きます。喜んで捨てる、喜捨。捨というのは、仏教では献身を申します。身を献げることを捨といいます。捨てるっていう意味です。それは物を与えることも捨でございます。人に何かするのには、喜びが伴わなければならないということでございます。あえて言うならば、喜びが内に溢れるならば、自ずと跪いて人に仕えることができる、という事でございます。喜びに溢れているならば、希望に満ちているならば・・・。

井深は、そういう人でございました。微笑みを絶やしませんでした。私は、その井深に今から 56 年前、若い時に出会いました。井深は私に人生の転換を迫ったのです。但し、井深は私に一言もおっしゃいませんでした。私は、名前さえ知りませんでした。でも、井深の姿は、私の人生を変えたのです。微笑みを持って、平安の表情で患者の左手の包帯交換、テキパキテキパキしておられました。私は、そのダイナミックな動作とこの安らかで微笑みを浮かべた表情とのコントラストを感じたのではなかろうかと思いますが、その時に一つの聖句が浮かんできたのです。私にとってインスピレーションでございました。「これらのいと小さき者の一人になしたるは、我になしたるなり」「この小さい者の最も小さい者一人にしたのは私にしてくれた事である。」こう今

の聖書は訳しております。「これらのいと小さき者一人になしたるは、我になしたるなり」というイエス様の言葉でございます。私はこの言葉に愕然と致しました。それは、戦後の事でございまして、私は、社会科学を勉強した事もございまして、一体この貧しくて、住む家もない、食べる物もない、日本の社会はどうなっていくのだろうかという思いに駆られておりました。社会をどうしたらいいのか、それが当時の学生達の課題でございました。社会という集団の変革を考えていたのです。しかし、井深が私に示した姿は、一人の人に思いを尽くし、力を尽くして、サービスをしていらっしゃる姿でございました。いと小さき者の一人にすべてを献げていらっしゃる姿に私は心を打たれたのでございます。一人、一体それは何か。先日、盲老人施設の協議会に参りました。この視覚障害の方だけの老人ホームが沢山日本にございます。これを始めたのは奈良のつぼざか寺でございますので、まあ仏教の方が多いんです。その仏教の方々が集まった席で、大変興味深い事をおっしゃいました。私達の施設の根拠は聖書ですと、仏教の方がおっしゃるのです。何かと思って伺いましたら、聖書の話を私にしてくれました。視覚障害の人が目が見えないのは、自分の罪ですか、親の罪ですか、と問いただします。そうすると、イエス様が、「本人の罪でも親の罪でもない、神の御業が現れるためだ」とこうお答えになる。「これです！」とおっしゃるんです。私はわかりました。今までの障害、あるいは疾病、特にハンセン病、因果関係で捉えて来たのです。それが遺伝という言葉で表わされます。因果関係でございます。親の悪行が子に報いたのです。こう考えて来たのです。障害児が生まれますと、何と言われたか、嫁の家系が悪いと、嫁の所為にしたのです。自分の家の家系にはそんな悪いのはあるはずがないと、お前の嫁が悪いのだ、こう言ったものなのです。因果関係が人間に報いる。聖書はそれからの解放でございます。本人の罪でも親の罪でもないんです。誰であれ、一人の人格として敬われる、人格とはペルソナ、ペルソナとは、神様が祝福された存在でございます。神様が祝福されたのです。この祝福から遠ざかり、排除された人に再び祝福を伝える。それが布教であり、皆様方のカトリックの看護なのではないでしょうか。祝福を伝えるのです。体を通して、看護を通して、その神様の喜びの訪れを伝える責任があるのではないでしょうか。井深八重は、神様から祝福された人として、ハンセン病に苦しむ方々に祝福を伝えて来た方であります。人間にとって、愛される時期、愛する時期をすぎますと、再び愛される時期へと入って参ります。年取って、体が弱って、家族がいなくなって、看護され、介護を受け、人々の世話になるという時期でございます。私どもの社会では、ポックリ病と呼ばれまして、一時期大変お寺さんが繁盛致しました。ポックリ死にたいんです。ポックリ死にたいというのは、苦しまずに死にたいんです、痛みを持って死にたくないんです、家族に迷惑をかけたくないんです。だから、ポックリ死にたい。これが調査によりますと、国民のほとんどの人が心の中にその願いを持っております。そこでポックリ寺にお参りに参

りました。関西が中心でございます。東京にもございます。ある老人会がお参りを致しまして、三々五々バスへ帰ってくる途中、一人のお年寄りが、倒れて亡くなりました。文字通り、ポックリ、念願通り亡くなったのです。一緒に行った仲間が、効き目が良すぎる、ってこう言うんですね。直ぐですから。ポックリ死にたい、でも、もうちょっと長生きさせてくれと、まあ本音をおっしゃるわけでございます。私どものポックリ死にたいという願いに対して、ヨーロッパの人々はポックリ死にたくないんです。ここは大きな違いでございます。何故ポックリ死にたくないか。人生の最後においてはゆっくり自分の歩んできた道を振り返りたい、友達に別れを告げたい、家族に感謝したい。何よりも天国に行く準備をしたい。臨終のお祈りをして欲しい・・・と。だから、ポックリ死にたくないんです。これがホスピスが生まれ育った背景でございます。皆さん方の中にもホスピスで仕事をしていらっしゃる方もいらっしゃるかもしれません。なかなか伸びません。ようやく 130 のホスピスができましたけれども、なかなかのびません。ホスピスと言うと死ぬ所だ、死を迎える所だと皆さん思っているんです。大違いです。ホスピスというのは最後まで生き抜くのを援助する所でございます。生を全うする所でございます。私どもは、 人生に 2 つの坂道を想定して参りました。子どもから青年になり、働き盛りになりますけれども、何時の間にか頂上に達するんです。昔は、定年が 55 歳でした。それは 50 歳の人生の取り決めなのです。今は、ようやく定年が 60 歳に延びましたけれども、人生は 80 年になっております。そうすると定年の後、10 年、20 年、30 年と生きなければなりませんのに、生き方が分からないんです。なぜならば、日本の社会が経験した事が無いからでございます。もっと山を登りたい、見渡しても上り坂が無いんです。止むを得ず、下り坂を降りて参ります。ゆっくり降りたいのですが、下りですからつい足が早くなると言うのが、まあ真理でございます。そして、その麓に死が待ち受けております。奈落の底を覗きますので、恐怖でございます。

比較民族調査によりますと、日本人は死に対する恐怖は非常に強いのです。避けたいのです。忌み嫌って参りました。だから、死は不浄でございました。葬式に行きますと、必ず塩をもらって、後撒くのです。清めなければならないんです。葬式の後で出た料理を精進落としともうします。清めるのです。死は不浄という、こういう考え方ですので、この下り坂を‘老い’と呼び、とぼとぼ麓を目指して行く人を老人と呼び習わして参りましたが、イメージが暗いのです。希望がないのです。誰しも、ここを降りて行きたくはありません。若い人ばかりではありません。年寄りも同じです。今や、私どもの社会が直面しております一つの社会問題は、自殺です。６年前まで１年に２万３千から４千人の自殺者でございました。５年前にそれが３万を超えまして、減らないのです。増加しております。アメリカは日本から見ますと４分の１くらいです。自殺者が増えません。ドイツも英国も自殺者は増えておりません。日本だけ増え

ている。その自殺者の35パーセントが年寄りです。年をとるにしたがって、自ら命を断たなければならないと言う誠に悲惨な現象が起こっております。こういう中に今だんだんと寿命を延ばしておりまして、必ずしもそれは明るくないのです。中国に大変良い言葉がございます。「せいじゅ」と言う言葉なのです。「せい」というのは、足偏に斉藤の斉、それに寿と書きまして、「躋寿」と申します。日本では、よほど大きな大辞典を見ませんとこの言葉は出て参りません。普段使わない言葉でございます。「せいじゅ」と申します。「せいじゅ」というのは、長寿を願うのです。白寿、白寿の次は、ご存じないと思いますけれども、百歳を「じょうじゅ」、上等の寿と申します。長寿を願っております。「せいじゅ」という言葉は、ただ年をとるのではないんです。自らを高め深めつつ年をとって行くということなんです。自らを高め、深めつつ、年をとることを「せいじゅ」と中国で申します。実に良い言葉だと思います。クリスチャンにとって人生に下り坂はありません。「白髪は栄えの冠である」と聖書に書いてあります。年取って白髪になって行く、それは衰えの印ではないんです。栄光の象徴でございます。「死にいたるまで忠実であれ、さらば汝にいのちの冠を授けん」と聖書にございます。「死にいたるまで忠実な信仰者として生き抜きなさい。」神様はそれを喜ばれます。死というのは、下り坂の麓にあるのではないのです。それは上り坂の頂上に位置しているのです。井深は、これから良い所に行くのだからみんな喜んで頂戴と最後におっしゃったのです。良い所に行くんです。人生をそこで全うするのでございます。それが天国への入口でございましょう。井深は、そうした人生を全うされました。井深にとって第三期の愛されるという時期はほとんどございませんでした。最後まで人を愛するということで生涯を閉じられたのでございます。井深の墓にご自分の筆で‘一粒の麦’と記されております。ハンセン病の療養所の片隅で働き続けた一粒の麦です。でもその一粒の麦が地に落ちて、今私どもの中で豊かな実を結んでいるのでございます。人生の人格の完成に向けて最後まで走り抜いた、私はそれが井深八重という人だと思っております。今丁度、赤い羽根共同募金月間でございまして、ここにも付けていらっしゃる方がいらっしゃいます。赤い羽根というのは、昔、スイスの山村で一人の牧師が木に箱をつるしました。箱ですからチェストと言いました。コミュニティチェストと長いこと呼んで参りました。その箱に「与えよ取れよ」と記しました。これが共同募金の始まりでございます。持っている人は与えなさい、必要な人は取りなさい。与える人も取る人も匿名でございます。誰が箱に入れて誰が箱から持って行くか誰も分からない。匿名です。与えるという行為、取るという行為、両方とも自主的なのです。自分でするんです。ここには与える人と取る人との間に信頼がなければ、成り立たないのです。この信頼において、赤い羽根は成り立ちます。そしてその信頼関係で結ばれる所、それをコミュニティと言うんです。これが私どもの拠り所でございます。「与えよ、取れよ」という言葉は、牧師でございますので、「主与え、主取り給

う、主の御名は誉むべきかな」というヨブ記の言葉ですけれども、とられたものでございます。「主与え、主取り給う。」私どもにとって、死というのは、いつ、どこで、どういう状態で迎えるか全くわかりません。実は、私どもの大学の教授の方が21号台風の時山で遭難をしまして亡くなったんです。実は私この後、葬式に行くんです。お昼から、いや、1時に延ばして下さいと頼みまして、約束を破って申し訳ございませんけれども、少し早めにここを出させて頂きますけれども…、年54歳でございました、不条理です。不条理を嘆く他ありません。しかし、神様はいつ私どもの命を奪われるか分からない。「主与え、主取り給う」その主が与え、主が取られる、これが盥から盥への間に営まれる私どもの人生でございます。一人一人、人生は自分のものでございます。どういう道を選び、何をし、どういう行動を取るか、一人一人の選択でございまして、全くの自由でございます。その自由の中で井深八重は、自ら苦しみの道を選んだのです。井深が苦難の道を自分で選び取ったのは、神様の摂理だったということを私は先ほど申し上げたかったのでございます。神様のお計らいであったのだと思います。神の摂理というのが私どもに働くのです。自分で思いもしなかった道に進まなければならない事がございます。私も井深を通して、私は実業家を目指していたんです、実業家になりたくて大学に行ったんです。なのに、180度転換をさせられました。井深八重に会ったからです。会ったと申しましても、時間にしますと15秒から20秒ぐらい、一言も言葉を交わしておりませんし、先ほど申し上げた名前も知らない。第一、井深はそんな事全く覚えておりませんでした。私が勝手に思い込んでいただけでございまして…。その15秒か20秒、井深の姿を見て、治療室を後にした時、私の心の内は一変していたのです。この看護婦さんの後をついて行こうと決心したのです。それが私が福祉の道を選んだ理由でございますけれども、井深を通して神様は私に新しいミッションをお示しになったのだと今にきて思います。これが摂理という事でございます。井深がした事、全くご自分では、意図せず、自分の意志ではなく、しかしどこかに神の手が働いて、多くの人々が井深の影響を受けて参りました。また仏教の話を致しますと、仏教に日供(にっく)と言う言葉があるんです。日供という言葉は、日々供える、という日々お供え物をする、日供と申します。日供と言うのは、お米を磨ぐ時に、一握りだけ別にするのです。これを貯えるのです。一握りずつ、そして先ほどの托鉢の雲水が見えますと、布施を致します。災害が起こると貯えた米を供出するのです。日供と申します。一粒の麦です。一握りの米、私どものできることはこれに過ぎないのです。これ以上のことはできません。でも日々それを積み重ねる事によって、豊かな実が結ばれるのでございましょう。

マザーテレサが新聞記者から質問を受けました。「あなたがしていらっしゃる仕事はすばらしい事です。でも、あなたがどんなに努力なさってもここで救われる人は数百人か数千人に過ぎないではありませんか。世界には何億という困っている人々がいる

んです。あなたがしていらっしゃる事はどういう意味を持っているんですか？」　実に厳しい質問をマザーテレサは受けました。マザーテレサはこう答えたのです。「大海も一粒の水から成り立っております。」　これだけです。私どもは一粒の雨水にすぎない。でもそれが大海に繋がっていくと言う確信が私どもの仕事を支えるのです。こんなことをしてどうなるか、何の役にも立たないではないか、と言う疑問をよくお互い抱きます。でもキリスト教にも、'a least coin contribution' と言うのがございまして、「最小の貨幣、1円玉を皆で集めてアジアのために献げましょう」と言う女性の運動が教会にございます。一つの最小のコインを一人一人が祈りをもって献げれば、それは大きな献げ物になるのでございます。その中における私どもの働きをお互いに自覚したいものでございます。主は、井深八重と言う一人の女性を私どもに与えられました。そして今、井深八重から何を学ぶかということを真剣に考えています。井深八重は私どもに恵みを与えました。大きな賜物を私どもは井深から授かっております。それはまさに大きな恵みでございます。主は井深を与え、井深を取り給いました、召されました。「主与え、主取り給う、主の御名は誉むべきかな。」

すばらしいご講演をありがとうございました。時間の経つのも忘れて、聞き入ってしまいました。ご講演の中から井深八重様の生き方の根幹に触れられ、祈りと人に愛を与え、仕える生き方など解り易いご講演を頂きました。午後のディスカッションにこの講演の内容を繋げていきたいと思います。そして、本当でしたら、ディスカッションにも入り、御一緒にお話し合いをしていただきたかったのですが、所用のためとても残念ですが、阿部志郎様はこれで退席されます。今一度、阿部志郎様のご健康とご活躍をお祈り申し上げて、大きな拍手でお送りしたいと思います。本当にありがとうございました。

# 編集後記

横浜支部浜松グループ

第46回日本カトリック看護協会全国大会誌をお届けいたします。平成16年10月8日（金）～9日（土）、横浜市において「看護の源泉に立ち戻って、キリストのやさしさ、キリストの手をさしのべよう」をメインテーマに開催されました。ちょうど、台風の大接近に見まわれ、帰路を難渋された方が多く、見知らぬ者同士互いの英知で無事に乗り越えられ、新たな思い出になったと聞きました。

また、大会終了後調査によれば、ご講演くださった方々よりカトリック看護協会発足当初の理念の確認、カトリックナースの使命、次世代へ引き継ぐ内容、日々の食と生き方の関連など、多くの示唆が得られたと感謝の声が聞かれました。

編集にあたり、盛会に終了した大会の内容をできるだけ忠実にお伝えしたく、大会のテープを起こし、関係各位より原稿をいただきました。寄せられたみなさまの意を十分にくみ取り、ご期待に応えられているか不安ですが、一生懸命編集いたしました。

この大会誌をご覧いただき、皆様からのご教示をいただければ幸甚です。

2005年　盛夏

第46回　JCNA全国大会誌
2004横浜（横浜支部）
「看護の源泉に立ち戻って、キリストのやさしさ、キリストの手を差しのべよう」

発　行　2005年8月
発行者　日本カトリック看護協会
編集者　JCNA横浜支部
横浜市戸塚区原宿4－35－1
聖母の園修道院
TEL 045－851-6051
印刷　シバプリント